2Qp−12　老年期における色彩感情の研究（４）ー色彩嗜好の性別・年齢別特性ー

夙川学院短大　橘　喬子、　滋賀女短大　○成田　巳代子、
長崎県立女短大　青木　迪佳、　京都短大　田岡　洋子、
熊本大　高森　壽、　宇部短大　椋梨　純枝

目的　高齢化社会の到来は我々にさまざまな問題を提起している。社会は多方面でこの対策に取り組みだし、個人は長寿社会を生き生きとエンジョイするためになすべきことを模索している。長い老年期を能動的に生活するには、精神的老化からの脱却をはからねばならない。

本報では、老年期の男女を対象に、嗜好色と嫌悪色について調査し、性別・年齢別分析による類似と差異から、老年期における色彩感情の要因を考察、検討した。

方法　１）対象、２）調査時期、３）手続、４）場所　　１〜４報と同様

年齢／性別	全体	老年前期 ６５〜７４歳	老年後期 ７５歳以上
男	５７４	３５７	２１７
女	１５２６	９７７	５４９

結果　嗜好色では男女、年齢を通しＰＢ系が多く、特に、ビビット、ディープ、ダークトーンのあざやかで深く、暗いＰＢ系に集中がみられた。次いで、男性はＢ系・Ｇ系を、女性はＰ系・Ｒ系を好んでいる。嫌悪色では、男性はＲ系・黒・ＹＲ系、女性は　灰色・ＹＲ系・Ｙ系が多く、男女共老年前期と後期にやや高い相関がみられた。嗜好色・嫌悪色ともに性差は認められたが、年齢差による大きな違いは見られなかった。全体に暗すぎる色や明るすぎる色よりも落ち着いたイメージの色を嗜好する傾向がみられた。